

中村俊定文庫
文庫 18
786



俳諧法義序

天田雅書

中村俊定文庫

釈迦牟尼世より文殊菩薩を階

就女子の妙此一字を授多し

ありしと成仙して不と付此

おまへに耳ぬるを五方此所一燈傳法

祇諸菩薩見獲て取うち

了此まじ地身子て女仙をさあ

はつふふしとけふい多り寸さる

中村俊定文庫

仏神を祀るとよみのまじり忽三十三相
八十種好の粧を奉りて南方世界
に志をなすと祝きまじり此功德
を身切かりて復り芭蕉年二佛
の妙を侍り小沢菴五明居士の流を
らむ出初の人に垂る仲風ゆり
の智者より居士と李俊一稲妻
此一与此いかりを放ち善く世のそ

量すも此幾夕を結縁一と後五
百とありて廣宣流布さきと希妙
氏其教大ふしと此法花と名つ
くふし方便と端なくをへし

文政紀元戊寅十月

柿壺長多識

此序也浪華より贈ホ〜号後程ホ〜
 正尊かり共免の病ヲ臥醫療志ホ〜
 終了文政紀元五月廿九日泉下ヲカスミ
 再浪華ヲ告ヤリ序ホ〜書法人と思ホ〜
 霧數百里地隔テ昔進ハ其注渡ヲホ〜
 光陰地過さんも本意ホ〜祓ハ其儘持行ホ〜
 侍リテホ〜人の志ホ〜つ〜の〜
 道進園誌



俳諧法華

四季游句之部

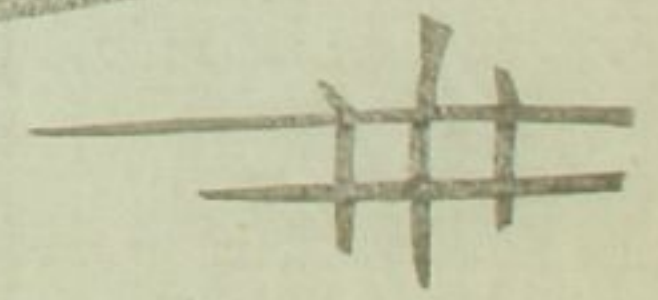
秋藩 應齋御風選

稻妻や酒の上みも隅田川 城窓
 麻はかま角の先と女足元あり 馬了
 風歌のま〜も旅のせら 可利
 筆のちらぬ〜 東臯
 山の井や〜 有隣
 神垣や多鶴の迹〜 以南
 ホ〜 今日迄 小笠人
 水〜 雀の成る〜 燈華

籟ふとあゆみ持るる夏乃山 妖未
 日当やし飛葉叩けハ蝶みある 巴陵
 びいやりと市堂へ入るや杜若 素来
 戸をさ歩む秋の草多き志たり是 渭南
 空梅の月や空と比壽やま 崔夢
 何をもも森み行顔や春の山 之玄
 此等の夢ハ長くもあうり 芦中
 空と比壽もかきる茶の流か 盈出
 春の雪降らせよやハみ降み 仕々
 綿ぬまて月見るよハ世ハ涼し 長可

雲の浪よるよし及て戻り 吾風
 鶺鴒の巢城ホちさたり 林日岡 九文
 門口を人よ志を破る落葉か 奈良比
 松風のをつ葉もかきく 柱蘇 聞之
 一冬城俵平つ先を流るる 湖山
 更衣天窓了欲ハあうり 一十
 空と比壽ハ今来とやハ思ひ 文雄
 天の川一結一足の風情 雪解
 草井や井根清も旅の空 永我
 草の夜や難波ぬきたる橋涼 蕪三

小夜葺像



稲妻此をさすりてはる月扱か 吉人 小夜路

五更布き家のきふ山口 山

一と流りて秋の七叶咲かす 渭南

懐りて去りて帰る水干 秋

梅和子咽の涼き小日の暮 風

出汐の上りて管むく流 南

艸臥の直るゆりて岸和田 窓

髪結かけて寒の目城をぬ 風

かしてまざるか馬の侍あき初時 南

花もつ艸の白ふ御會式 窓

尺管のあざと云々色しうや紋
巴里ふき鳥の歩行一様先
宮城、歳をしまる月のみ
み林のこつゆはさくぬ離賣
熊谷の堤、事一野分して
夕ア~~~~和讃ゆカヨ
万代の姿あぶらぬさのり
すく人下麻のぬるぬくる
箕吹す名六浦の名主たけて
吟るもアものり~~~~小謡

風 窓 南 風 窓 南 風 窓 南 風

取の糸をさそて遠入る葉風呂
くろ川田し如き城より
山茶花すくむすじの帯にるい糸文
おの糸懸る~~~~さます~~~~ひめ糊
まにかちり~~~~志か尺山城る人の声
北の山嵐、虹を細く免る
施舌漬の影あるゆり糸帯流下
姉ハ柞の葉を拾う人
日外の月も借~~~~丸木舟
だ~~~~ふき浅て杖穿やる

南 風 窓 南 風 窓 南 風 窓 南 風

ちんまうーと建ーし窓の風雅佛

一なるー雪の降すはーう

子如原よー三春の布を注戻り

喜吹さーして土拂ふ袖

淋ーしーのりかーとさー巻の上

船の嘴さー唇さー如月

南風窓 南風窓

雄麻鳴浦の管家此夕烟蒸ーさ方の影
やゑたえんーけーし麻府第一之風景耳
志重了まことあ千古不栴の勝地と云そん
ささしハ毛角アア了深よて舟越さる一村あり
其處了松林亭可貞姪聲葦偲貞と呼
ち字ぬさりの風子あり世了寫るものなる
其さぬさーしーのいやしーらさ依ハ公羽の屋瓦と沢
りー尋る人ーしとさよさる清風々とまのさる
へしあちあちみ名を賣ひろ免んとみもあ
ゆと文かまよかまうーハとひまーしとちさかし
當も所勝のくーくーハ一板の翫も

とあつせはあまをもあつせんともうたこの
 おこしハヤク帯ハ志ハしく交らして足
 才名処もあまハ只その伝み書志多し
 へ回老の法風子ハ告年々知るも風流
 をたつる枝折ともあつて思ふの
 夢くちこりの心すハあしし

題松林亭

庶けり、来、松風月の宿

題秋聲菴

在、覺、ハ、砧、中、路、ん、月、の、宿

御風

四季名家之部

日永——とび——思ふや鳩の声 京 菴丸
 水み流むものハ元ぬれハ流る 尾林 塊翁
 踊ても居るハ梅咲 豊后 葵亭
 春てありもの音ハ皆花の上 近江 千影
 花折——とび——人あつ木のりか、干當
 年——とび——鷹も嫌ひハ帰る声 周防 古梁
 凡てす——とび——舟の中き 浪卷 竺翁
 秋ちやる馬ハかき柳—— 京 米彦
 まき凡ち——とび——や柳の木過つて山 江戸 鶯笠

卯花みねらうと出る田植か 江戸 寥松
 皇女のちかきも足る膝の猫、雀雨
 鳥みハひひきもけし春のる、何丸
 淋しきみ床ししたに折るつしか、護物
 紙しとちりるちちせもあさる、對山
 玄冬の巢迄ちのしや旅のる 何内 月簾
 夜ハ降らぬものこそ思ふ花のる 池田 吳老
 鶯の聲しもかきやと鈴釣靴、遅春
 若菜塾ハ低し眼を置雙林寺 肥后 仙介
 昨日も降るをきもの哉花のる 信濃 若人

佐保姫の機嫌哉吹や松の風 箱館 布席
 春の水遊よら花のともき 長門 羅風
 ぬとるある豆腐買え梅の若 因幡 馬陵
 住よしし一行常る遠す良き橘 兵庫 桐栖
 志らぬぬえふ法きや并 京 雪雄
 我、敷の森やとすそ其の月 陸奥 乙二
 踏 ちり 雪端を つし 時多、雄淵
 呼ハあるやとすそ足せて 忍 虫、馬年
 一 七 寺 し 八 拜 み 加 らん ち き 屋 鳥 浪華

薙——の空ありあけの暮の月 浪華 長句

今——も山見下りまぬこけもけ、公路

雨降——と田下夜もあつ照射可ふ、蓑六

水足せて静——ろせきや膝の畏、井丸

四月の幸——さつろる橋の石、辰角

鴉の舞の澄んとするや浪の——、魚眼

一足も臨——ハ引——、如田植、草香

舌ちよとの酒めちあつ竹植て、祇杖

さもろ——ふ般若もあつみお古き 安藝云 玄蛙

松島の敷——よまろ、牡丹うき、九十

河の香もあつて青田の月夜が 遠及 五雲

百合きうろり——カ奈の——と衣あつ 肥后 三考

夢むすぬゆ——あまきいふる袋 丹波 桔朗

ぬきもぬかぬかたの——とゆ松真 三河 卓池

心遠浅黄みちるや——あつ衣 伊豆 一瓢

や——うき——と月夜の善光寺 伊豫 其楪

大藪や嵐の——とひ百合の花 對馬 曙堂

蚊疇着てま、昼あつハ重津 我後 幽嘯

山の尾も越す——螢のなき—— 何内 浅処

地み置ぬ牡丹の上の月夜あ 江戸 太筇

藻の花やひげハ本ささる竹生島 京 梅價

玄中の一州取やかききん、金菜

薰之流す沙汰ハあゝぬ、郭云 浪花 奇淵

中——東みおと妹のさる 浪花 月居

老やすきむねうらぐと月見か 江戸 芝山

出梅少くもや室古しそむせ 常陸 李尺

摘んで見て叶す葉すや妹の妹 南部 寛兆

影たぬ影の易さや後の日 吾馬 毳蝶

かゝまりて静——妹の松 泉州 喜斎

雨と成風とさるる日——折赤し 越后 知可良

海士、子の影をか——みよる芦の巻 仙臺 百非

妹の堂唱ハぬりさる叶——の古 播磨 玉屑

秋風やさ——のすまひも叶の上 伊丹 凌雲

角力取の扱は是や、秋の暮 甲斐 漫々

不破の月位世見詰てハ来さう 三河 秋采

行水の築ろ——常とハ信の月 河内 鸚鵡

浅茅生や拾まみすこまきを血の汁 本宮 芳言

立鳴の行かあ——みもあゝぬ 津輕 王之

おや味すゝる鬼をねん秋の月 河内 未船

乙

十六夜やがる約束も峰伊勢の松椿堂

軒南の柵系みもとくして虫の声平角

川京で干ひ箱ハ隣貨僕よ芋魁

山老の代の定もそそぎ之の月老

初雪や田尾ハ畑並好岳の上輜

山下茶花や酒屋雨ハ玄塘も百姓塘

獅子丹と舞波哉二日野多楊急雪の宿

鶏武汁陵やあ武を陵と斗武する陵浦武の松陵

初霜や武云陵つ武て陵又武る陵麻武の角武

煤武も陵つ武て陵我武夜陵こ武ろ陵つ武て陵出武る陵色武

々武々陵い武み陵月武夜陵ま武り陵う武枯武尾武卷武

あ武い陵ま武り陵う武思武ふ武師武走武の武月武夜武か武

踏武ハ武ま武り武ウ武鞋武も武友武々武夜武の武雪武

山武鳥武と武ま武り武免武て武知武ぬ武石武菖武の武卷武

小武ま武り武あ武り武尺武寸武色武の武水武

出武る武ま武り武あ武り武出武て武あ武り武冬武の武月武

ち武味武も武ら武色武し武し武午武も武み武か武る武路武の武水武

柳武一武花武心武も武つ武て武も武平武忘武

何武一武喰武ふ武て武衣武の武機武も武ん武そ武暗武漸武

井武眉武

井武眉武

初雪や流して来たるもの、上浪速 三津人
 冬の日は一日人のうららかなる、北島
 牙る夜や壺よりかゝる磯の蛸、白樂
 四方かゝる冬のせはるや三上山京 鳥頂
 雨桐月の日記みも雨はあかりあり郡山 子容
 老て行も者み子あさすむきか南部 真々
 牡丹却てやる思も一年の暮る尾張 月底
 鳴子多酒の銚子とくもあす相模 鳩啄
 神ものや雪も仏よりつらきし信濃 一茶
 着て足もは暮はさたあらしのゆ、志壁

四季混雑

宇之比曇りの足か布し木も堀えん危浪華 卧鵬
 夜は柳余もくらさかえり越中 千崖
 桜は心のさくらも咲き下総 茶彦
 吟時ハよ〜く志もさるまう鳥の子甲斐 嵐外
 初年より〜小三好くらきて吟丹后 萬籟
 近江ハ梅も柳よせ〜ぬる南部 谷雄
 冬牡丹中〜〜寒き色もあし浪華 松子
 夕顔もさ〜し小の家や夜細す仙臺 士由
 山吹みも〜俗乃浪華 魯隱

霜の影 鶴瓶落してきて居る 点 木海

雪ちるや 鳩の巢ちと西住屋たし 浪華 六響

松島の月 下り返る 志らるをが、貞瑛

雀子や うれしき行 子の袂より 二本松 與人

竹の子とむとつろ 音麻子可南 伊豆 有鱗

花を花 埜の苦おすちん 懈の穴 浪華 三美

月よ 一と一と 向息 降る木の系 尾張 足彦

夕立や 44 のや みるぬる家 本庄 木賀

推の木を伐 けうきし 也庭の月 湯殿山 淋山

ぬるるを 神子 思くぬる 備后 藏六

雪の尽て 舌あ 老木 可那 伊丹 寒

ち きれ 守人 綾のあま 八お 中山 菜丸

畑の梅 咲 花の枝 枝 揺る 浪華 希孫

さ 鳥 尺さる 春の空 池田 一扇

志らる 榎も ありん 本 願寺 丹後 鏡道

五月 花 する 氏 中 帳 一 づる 火 串 か 浪華 百嬰

白雪の山 用きて 遠し 小夜 礎、福来

山彦や 照射の 祈い あやま 庵十

十と夜の 白も 志らる 蚊きり 夜来

山かき 巾の ひ 格や 雪の 義仲寺 閑翁

竅喰^江行^可とハ云々如月夜^江可^明

山も月もあつち^京と云々のと云^布雪

塵もあ^浪と云^華の^王雛の^雙鳥^入来^夕と云^雀雀

陽炎や^肥け^后の^久二^喜鳥^磨の^別家^家

むら^大ま^味と云^馬と云^来と云^立と云^立と云^立

世に出^米と云^沢と云^古と云^翠と云^翠

枯木折^阿る^波御音^阿と云^波と云^里と云^里

雪好^豊と云^后と云^月と云^化と云^化

大^松仙^浦の^三柱^津と云^名と云^名と云^名

立^廣枯^島の^延木^史の^史根^史と云^史と云^史

梅木^浪す^華と云^華と云^華と云^華と云^華と云^華

孝^豊ホ^后と云^后と云^后と云^后と云^后と云^后

さ^浪と云^華と云^華と云^華と云^華と云^華

大^大雨^津相^津や^津羽^津織^津と云^津と云^津と云^津

大^東刀^北奥^角や^北と云^北と云^北と云^北と云^北

山^阿路^波行^波人^波や^波と云^波と云^波と云^波

雪^尾一^張九^張比^張と云^張と云^張と云^張と云^張

若^伊芝^豫や^豫雀^豫の^豫卵^豫と云^豫と云^豫と云^豫

法^尾と云^張と云^張と云^張と云^張と云^張

月^薩と云^州と云^州と云^州と云^州と云^州

引—をきいききり立ち—松の床 信後 赤子郎

何—事—も足もとみあり—春の月 浪華 呵呀

空色や—とときり—通る花の中 尾張 不轉

夜—何—心—のす—そ海を舟 能登 晚籟

埜—の—のひ—かゆせの—艾店 京 武之羅

若—州—也—小松—と—よ—も—州—の中、 大和 白絲女

春—雨—や—宿—の—一—馬—り—三—ヶ—國 伊賀 松壽

春—空——月—み—見—ら—る—枕—もと 安藝 重行

内—ろ—居—て—おん—して—見—ても—様—が 伊賀 廿古

春—風—や—ま—き—登—る—色—の—ま—りの—目 伊賀 士得

紫陽花や枕か—下総 李峰

春風や日の暮—安藝 西坡

初—雁—や—今—一—聲—尾張 沙路

宵—拵—拵—て—秋—ハ—且—々—の—京 其成

人—の—汲—多—と—女—足—え—て—采—古—多—、 杜 蓼

森—安—如—此—幼—妹—ら—守 三

春—風—や—浪華 天采

夕—や—か—ろ—り—と—か—る—ま—りの—春—、 沂 舟

早—合—や—日—あ—る—夜—と—ハ—筆—も—甘—く—は、 我 雪

常—一—其—や—隣—歩—行—此—州—上毛 茅唐

卷 杜鵑 月 雪

冬と 敬るや此時水の多きくさき 御風

ちとまき一都のちみまき

冬月ハ地みもささし如光り事

口先よりあふ事一斗重の如

ふ 字みして配多し

くもさし月吉み美草の詩は

宋 宣

柔如香やかしおまきみまき心

四季幾句之部

嬉しくて時であらう夜の雉子 花館 文好

夕照の壁み近よりは雉子う南、三千雄

白の滝 木の葉降るおと多、曾染

陽炎より向し神むうは此うか、武彦

水音より下下のつづり臍白、芦船

香取のちりり かりがる牡丹が、可昌

置霜や人の夕麻桐子扱の如る、桐山

小流の音よりしか葉も尾もか、鯉仙

毛髪もせし冬のはてはる地多か、吳水

乙子の来る冬は空や冬せん、才巳女

藪入やまゝ湖ハ鴨のさき、菜雉
花の家冬ハ冬角の奇麗あり 大曲 逸
山の嶺ろくかゝる行ぬ又この戸、湖舟
田の垣や初うらはまありぬ、吹 魚川 栖南
平一の花ややろ淋き世帯、梅友
鴨の立平一てもあし夕心、以奈保
海棠や隣もたあゝ雨の降ろ、二川
夕月出見たり、歩行一麻子が、以曾あ
散る木のまふちらぬ木のまふけをまき、雪彦
結造よ水の上より、一几中、章丈
水より花の生る旭のふ、南紫

袷もく日やうをいしまる田植が、梅
行一かゝる雪のまつせや初はら、里考
蛇神一の祠でやろや春の妹、鈴人
美歳や妙一の茶一の百千色、宇考
いちと嘆て世を糸ハ世を糸可事、善志
箱の香や何、ま遠月の照のる、茂道
二三尺ふてえるや、初ちくる、玉桂
我ものちをうたうたう、秋の香、東李
花をいしてぬみおけるあきり、六川
加馬一の肩をすくをちをま、汶水
松のまのとも、夜にある清んか、雪蓑

序一杖の酢ハ戻リ々五月雨 相川 路友
 夫也くききと出る月をえてき、路用
 い川よみても味中へすこ福壽州 鷹の巢 其扇
 白雨みもろきく鳥や峯一の松、舟里
 丁の声種屋作きよとおかし危、可諷
 雲板をゆやゆすこか茂、厥、梅記
 啼 ふぬ 日のすなく ふぬ 古多、九松
 夢捨みあり一枯野の月夜か 鴨木 秀英
 沢蟹の居かか入る若者可一南、三甫
 沖空や湖の水敷件一子、梅嶺
 蝶 く の押も居らぬ 志登 か 松平

君、代のきとまひた 一 稲雀 天 来湯
 名月の出ぬ 百々 雲 か 去あ く 一京
 菅笠を唄て掛へる田植 有 山 田 東
 三日月を尺送る橋の涼可南、和柳
 雨風を押し梅ハ笑 く 一 麻渡 楚雀
 猿 う 放き て 月 と あり か 一 石根 知石
 さうとて い 毎 々 一 音 あり 雨 丸 可 南 玄因 倚松
 大 不 皿 と り て 一 雪 枝 あり 多 ん 一 仙 風
 糸 結 や ち 一 し 空 の 景色 あり 服本 哥石
 若 州 一 の 敷 み 入 り 一 小 松 原 豊 珀賀
 ま う 一 い 一 我 友 来 一 梅 嶺 有 舟 岳 以 在 和

廿ハ涼しし山の奥アも笛の音 舟岳 桂志
那雲の放ききりきりさるるか、山色
松風の地み吹石か路の花日和、萬葉
衛一立碇ア、阿ちをさるる、蛙三
山根行一人ハ小きし果長鳥、柏宇
馬の子の宿、ぬ口や春の舛、田哉
日當の一枝折らん帰一 菴 秋 夕々
公家領へ別る、このりや杜若 捨山 扇 仇
積りく、咲て居る道の新、石泉
進み出て虫ハ啼一此れ月夜、尋菴
行一 甚也まゝの園を董咲、た可里

行春や嵯峨の夕部もがせあ、可成
言浪やさなう、甚の夕希き、丸中
蚊きり舛雨りる、夜を白ひ、櫻坊
田の雨もさると成る鳥と人 阿仁 湖翠
根風の通る口さる雪の及、吹た羨
何尺越深雪とらや門の山、亭牛
出流一 甚二時都一の夕日和、乙章
霧雨やと来く人の天窓つき、吹輪保
何尺せしと此葉啼せん川向、蝶可
名月や露子一 心も置易、枝鳩
夕暮の舛一 あもさ 秋暮の虫、兔月

一重宛取日の出る牡丹可市、吐曉
比良く〜小春の渡る鐘、鳴、宗阿
鳥の来り雲、待〜里若葉、如文
一竹節みななるもの、冬、の川、有交
和蛙京の吐、とさ〜、文幣
咲あ〜、あ、は、さ、た、か、る、也、秋、の、む、菊、二
花、ち、る、や、月、の、初、の、中、の、中、可、翠
よ〜浪の下みもさ〜如、漸、が、銅山仙客
多、仙、の、夜、の、塵、を、一、蠅、一、五、桐
々、の、ま、の、し、松、丸、あ、う、林、の、風、一、風
孝、行、一、あ、ま、ま、あ、梅、の、家、市、丹

山住や膳の向、一、州、の、あ、路、一、莊
夕、空、や、さ、の、ま、は、と、あ、る、門、の、梅、可、舟
此、二、日、候、の、舞、一、も、さ、あ、う、梅、猶
湖、の、あ、も、臆、と、さ、う、う、う、如、山
鐘、撞、一、撞、と、一、降、る、や、和、志、と、連、尺、州
乙、冬、の、日、和、定、て、あ、う、う、雨、石
山、株、み、風、あ、う、と、さ、う、若、可、市、其、扇
ハ、月、や、夕、日、み、さ、浪、も、あ、う、為、春
息、か、け、て、日、雪、さ、さ、さ、あ、か、東、塾
腹、の、あ、る、中、一、う、あ、う、春、の、日、市、班
か、一、風、の、あ、う、行、一、し、冬、の、日、仙、笛

静——さの仙の鳥や、暮木立、藍々
山口や、雉子と小松み夜、明る平目竹園
秋風吹や、鳥の背角の先、五峰
水——住虫のやうく、鯉の声、李悦
花思ふ心、誰も足事——く、馬三
我、休をとまよし、も羊の、小虫か角箱巴文
雨、竹、山の低さ、雉子の声、良雨
自——秋み馴、さる小鳥か、春朗
釋——如堂の灯を中み、て、鳴、蛙、遷、喬
三日月みたまみ、竹たる柳か、月家
藤、轉ハ、唯松風、く、神志、と、飛大詰牛真

龍膽、云の香、残る、栗か、圭得
秋の日の、玄中、地、種、や、山の鐘、崔、齋
等、用、了、日の照る、岳や、崎の、常、和
枳の、有、や、甲、月、も、古、く、良、松、童
一、志、を、時、る、て、い、と、り、山の、白、朝、耕
花の、時、候、——、如、く、枯、野、原、白、喬
さ、る、く、如、山、み、癖、あ、く、小、春、晴、五、柳
木の、鳥の、一、方、ま、く、如、四、日、か、眉、長
賣、を、ら、の、馬、リ、——、出、せ、ハ、あ、く、文、陽
松、秋、の、様、様、を、さ、る、や、山、雉、渚、雁

神宮と平雪降る且可南、白洲
火ともしし、眼鼻ぬくし、春の百、以衆
あましく、ハ雀足る木のあまが、竹映
行、秋ハ風の中より足るあり、幸齋
六月の途の口より、郎の山、墨琴
庭起のまらん目出たき、蚕可事、素十
舞や、ふさがるの月の春、有桃
啼、も鳴、二十日の周城が、標標
二つ目の山ハ尖りて、妹や、立、志竹
冬の山鳥も、誘りて、眠る、野天
冷や、雀の七日、雨もあく、芳水

明る戸城ニ枚拵、春の月、菅雪
啼、鳩子、あけ、天気や、岡古香、黛嶺
陽火、や、ま、り、也、唯、旭、影、九、如
ハ、庭の、花、前、作、り、る、や、不、二、風、素、明
霞、日、や、耳、り、や、り、或、風、々、来、る、標、郷
ま、り、し、り、今、日、又、多、く、帰、雁、既、成
家、ら、ら、も、眠、る、如、蝶、の、空、亀、遊
遠、り、風、ハ、あ、て、ま、し、も、の、と、帰、雁、月、郷
多、の、啼、ホ、ハ、大、る、之、春、の、春、松、蘿
暮、り、日、の、ま、り、志、を、し、ち、花、木、権、仙、友
法、か、ち、く、月、夜、り、志、た、は、若、菜、か、翠、和

料——花の白きみれをさるの月、民児
と那兒をハ低く初たる物帳か十所青互
根やリリ夕吹居る尾花か、周崔
盆色の月さしし馬屋可奈、古久二
雪國の雪ハ苦くおし雉子の声、一長
大雪や命——果報の山鳥、之喬
飯住の甲斐々有るん壁の月、竹樂
いつまゝ雪を流ふやら庭の松、新市
軍東の人ハ多しそ務の秋、井尺
みくす程ちりし尾花も枯る宛、春塊
入水り才とくは音や小夜衝、一記

箱ヶけり雀り一日和をさし横手連成
行水の出もせぬ芒可奈甲把口
行——雁や處くり日の暮る、一帆
赤くくハ出柳を枯らし綴子湖風
青梅の吐り山を越り色六郎其國
牡丹又る人二人迄暮みたり叔天朗明
此ころの花押一即やか堀田但丹
夜ハ鳥の素もをりして杜若、硯月
月の雉雁の屍おちと宗賀
露の素娥歩行——螢や庭の奥、風也
雪堂や松雪るると思せ、南柳

まま〜の鳥み届くや萩の風
 素練
 昨々の中〜す〜ハハハ幼様
 可朝
 若木焚て親子向ふや冬の日
 可然
 眼の字〜妹々キ〜ぬきや山の月
 麻連
 腰〜ハ〜飯喰ふ妹の日和か
 松枝
 音〜の雨ハ降る〜雛及巻
 一喬
 春百や木賊す届く風の家
 素考
 菘芒や〜る〜日の寸す田尋半
 児雀
 玄昇〜ハ〜して置る冬の家
 連和
 う〜運切て迷る〜江戸の春
 真書身
 朔日や好ま口利〜田螺守り
 可賞

秋の日和硯の口〜カ〜
 竹雅
 美〜〜〜移の啼み色草の月
 八声
 牡丹みハ〜らぬ雨や昼の雨
 事樂
 川〜一〜隣〜居たり月と我
 梅月
 草〜臥〜息〜途〜行〜子
 佳京
 煮草〜子〜松ハ〜冬〜月
 日条
 梅々香〜分〜来る〜車牛
 馬練
 沫雪や草〜木の芽〜も〜
 梅佳
 一〜〜〜雁の行〜
 南桂
 晴〜夜〜奠の生〜の色
 霞曉
 死〜の扉〜木〜〜
 芳和

白子箕城かぬせしあふも秋の暮 行脚 荃楪
 春雨子一あけしわたり居るをみし 里 曉
 野一子一ゆさやさいししもあり秋の蝶 桃 里
 芒可く撰り出ししう女高花 秋 窓
 柳一子一生る庵の月日可南 有 隣
 呼出ししたア一水あり社 留 貞
 卯の花を子の日の中みりせり 文 好
 初さそり木陰もあきて仕ぬき 宗 賀
 空にしき踏る足あり足付し 風 也
 吟く雨、降るさし雲の山 南 柳
 釣竿一の曲り並すや月雨 梅 友

とく起て飯焚舟やちきき書 六 川
 腹有し追たはるやうと妹の雨 東 李
 根のあさハ草一子一似て春の雪 可 貞
 秋の蝶若よして仕るあて宿しう 二 川
 中城用書も波山岸のすすん 可 昌
 曼くの浮世め出しし夕々ん 吳 水
 毎日の雨ハ短く 祐 尾 氣
 うと比壽子一あけしあけ記多猿や病 曾 梁
 うゆるの一日降し 稻 上
 思よる子一ニワくらもさぬちき 雪 彦
 兄のうししあ志こりハ忘るん秋の暮 章 犬

世の中を世の外を去りて
 念月や軍の地を去り何心
 誰子啼く聖の本をさかぬ
 白雪の端をさぬ也田植
 長閑さを集知て言ふ田毎の不二
 若草や桔梗の原の其むのし
 歩路をさぬもふのたぬぬや
 七夕の水をさぬもふのたぬぬや
 芳竹や竹四五の雪の降る
 散りたり小雨交りの小米花
 時多口をさぬもふのたぬぬや

以曾為
 南柴
 里考
 宇考
 竹雅
 栖南
 可然
 一帆
 藍々
 可翠
 竹園

雪の山湖の中みも見え居る
 蚊きり大りおせびまを角大師
 天晴か雁の次女や峯の月
 去るそらも一色行くぬ夜きり色
 御屋敷の内へ出またり堂狩
 梅子り小河雨も降せがし
 梅の子の足おろし何れ相一系
 何れらしし羌負哉世を萩の色
 人聲ハ木かえり色雲の峰
 一川散りて数よき鳥の椿可南
 利立の天窓の上や探のたす

湖翠
 李悦
 其扇
 仙友
 龜樂
 芦中
 偶身
 南桂
 梅月
 盈缶
 竹園

小つくも松さへあまか冬の月 南陽
 名月のと馬を月の元月と 崔夢
 白牡丹出家喚はるりりり 日条
 一夜さも猿ハ猿さるり啼 素人
 幕一申り打込るや春の風 李悦
 鈴の口おくも相のねり可 古久二
 ちと手書一沙並してハ山家地 其國
 行一春り取や深の癖ハさるり 其扇
 紫之跡の實を和きと山嵐や後の月 梅記
 五月るの雫とゆりも多小鴨か 馬練
 其古多の子のち留鳥と又て墨 馬瓢

仍く山の姿や雉子の声 匪石
 裕着る月の心も志くくを 知石
 春風の山へ交りてまらみり 鷺洲
 菜の花やえ録臭き山の家 素明
 村雨の中や眼の舟柳一ツ 倚松
 安く菜や日向みあがりて些三寒し 梅瑯
 伎橋あ月のゆりあし 既成
 水あそび一あしをさぬすや春の天 武彦
 宗鑑々窓一ツてる今一日の月 秋窓
 上京の始末く出来り 田哉

世

子子もあやうく牡丹折る氣は
 之の風夕月くを侍へり
 行一書り近付蝶の風情か
 了の毛を端ハまきききの峯
 大根り一梅きりあり料理の百
 山百や多の上よりすめ風
 きの羽のこめてあめく野多か
 三軒のまほ詰もじとこの子
 五月るや松も柳も軒の雨
 ち清て果報休たふせたり春の萩
 ちののほありて林もま枯槎か
 以九和
 之玄
 聞之
 窓雨
 古久二
 麻連
 桐山
 墨鴛
 月家
 圭得
 黛嶺

鳥のとぬ形り秋行け浦の山
 月かげの一夜ハかき椿可有
 是まりのま中りりち多柳か
 冬の山月ハ出易きりあきり
 全浦りり
 五柳
 朝耕
 文陽
 渚雁

夕暮りハ何りたといん久々の海
 浪しし寺の夜ぬや田植唄
 笛しきまの林しきや妹の多
 夏の月半こまきしめきりりり
 嵐りし毛半きりしあやや百合の花
 簾うけりて小窓の春を詠りり
 眉長
 梅嶺
 白洲
 以桑
 竹映
 幸齋

我欲を放きてしりの揚狩 九中
 多柳や我たす子のあしとし 翠羽
 雛子啼や夕日のあしの国道外 春長
 長閑さや煙の及ぶ雨の里 露光
 白梅やとちり向ても祇堂の家 焚雀
 蝶もまじり草一句志を行幸おぼせ 朗明
 夕暮り鳴ぬ桂のあけり 尋花
 一志中魚く中あきぬきか 石泉
 木兔の耳の先におの風 扇仇
 宇ら比壽や小たまもの声てあし 如衣
 簾たむ夜ハ面かし装此白 芳和

夕暮を柳たけけの笠口可事 左松
 市毛の溶し舟さくちきま 松蘿
 朔日のるハ吹まじり柱すし 月郷
 かきし中法師も入よお様 有隣
 世の中一法師も入よお様 可貞
 たのむしや此陽もの蒼妙までや 渭貞
 名月やすくみ野火ハ名の中 文好
 曙や又さるかき吹を名の風 宗賀
 岩古賣の塵み撫るし紅きふか 風也
 月の梅薫る中一てもあき毛 南柳
 稲の香や日の暮らまじり 梅友

之晴可何の思妻もあうり
夕るやあふも夢を兄中
さましくの名をやりて
眼の寒くも遠見き
神袷袂おほふし
犬糞も拾ひて
昼顔や玉露一合
水海の大き過ぎり
袷着ての雪
むく漸雨の晴
多由へ凡のむす

東李
二川
可昌
吳水
可笑
曾梁
善志
雪彦
以左義
以雪石
南柴

物々々の取付易し
夏の月其碓
吹すさむ風
人中へふ
くくひす
馬引
蒼の夜
松風も
きよ
秋の蚊
多岐のく

里考
六川
宇考
梅友
栖南
善志
藍々
竹園
李悦
菊二
素考

竹馬耳散かゝるく一枕の巻
風流ふ川の曲りや藤の花
日の岳を横り出たり冬の日
白雨や只捨らうして門の山
山の月苦しく水も移り
日の落つてまゝと若女唄の家
お風呂の透り吹く春の風
涼しきや置きて中より一ツ山
水鳥の果耳かゝるく空の峯
村雨の晴し心やこぼれかへ
梅の木ハ梅の形乃志と手かへ

古久二
其扇
梅記
素明
窓雨
月家
朝耕
文雄
芳和
其扇
丸松

七月や露の上なる人い
雨やあつた木のさくらや致やふ
多海のりつうりつり杜若
見魚の千疊を戸の白
水引の結び目や春道し
行春の風引入せる思置ふ
卯の花の一里ハ通し酒屋
かひくしき草の風情や別業
世に寐しるるを忘る相撲取
蓋とては空くは又も青田か
七夕とてよ名耳は喧ハせり

亀樂
章犬
可秀
兼二
渭貞
吳水
三千雄
曾梁
二川
宗賀
東李

蓮より冷るまゝに格別奇麗き
 山雀のちがしし立寄やねの雲
 短夜やふとてあつ家鴨多
 畑のちの残して墨や花莖
 残雪や子ハ点ゆゝあ音し
 茶の相々需て味とちりあそ
 麻のまゝ啼に処と霜の月
 五月雨の筒子きあう糸雨
 世の中のもも又入る一月の雲
 隠きよてさるる春の田螺か
 毎朝の録とく百もまをさる

梅友
 以奈保
 雪彦
 善志
 文好
 風也
 南柳
 有隣
 一帆
 南柳
 忘而

牛馬を散らさるる極の花
 正月のきもすまを神田柱
 周古鳥我よりあつ誰も居す
 鐘撞けハ幸みして鳴千音
 三日月の物之よやも麻子か
 露の夜ハあつあつ花の花
 尺子出ると尺るとさる木槿か
 棧の跡と出るとあつ花の基
 立舟よりさるや根根の花芭
 手放さたよとすまは角力
 角力取のうと姿も静し

古久二
 月糸
 可貞
 文好
 其扇
 南柳
 藍々
 呂水
 有隣
 東李
 梅友

もの志遠する程吟也用古多 渭貞
瓜の香や何れもあかあけき 宗賀
戸西麻の鬚さすけく雪菜花け 南柳
来り妹ハ知れくあけ可和 風也
傘一さして母の思もあけ子烟 佳京
月弓出て一本きくお杜るる 雪彦
尾並んで旭り向ふ糍か 三千雄
雪の雁歩行一筆伝もあけり 風也
梅の香の一癖一梅や音のを 可秀
妹の両思も一降るる 章丈
人々けのさくも秋も門の水 可貞

柳一とく一跡り来り早苗舟 宗賀
白けしりもさくき白もあけり 二川
る嵐りりもさくまろ、柱可あ 文好
鶯りり一饅頭ハ喰て仕あけ 風也
月をさる切あけあけ春の水 曾梁
菘先や膝り上り古おんか 可昌
宇る梅りりりりて娘一娘の魚 香隣
連の上りも揮りの吟みり 可貞
夕立の洗しおけりわね世山 馬三
三日月の影や蚕のふれ 競 梅友
岩松り雨の跡ちる卯月か 南柳

初冬のくらくら風吹や牛の鼻
 正月ハ管の先毛霞ルリ
 海棠子一筆山風ハあつらう
 戸の口や鎧押ししおろろ
 市の中や桐の栴檀のうき咲
 咲梅子一筆織の莖おろろ
 目ろ一筆青一四月の竹下駄
 くらり一筆心うつせと花の故
 靈祭障子の墨言日まうらう
 日のあるもまうらう冬冬の日
 傘一筆してかえりて墨や風のも

文好 吳水 章犬 龜遊 素明 東李 風也 文好 南柳 宗賀 風也

煤竹や宝蔭院の真似する
 気の細きものにあつら冬木迄
 蠅井の子ろも届くや松の風
 花活々去さハ又入り一筆氷
 三棹一筆出り又頃し卯あつれ
 神花子一筆竹臥て深山も
 湯一筆いささ啼て鶯の雨
 今日ハ何の日ぞ咲ぬめ一筆木槿
 肝の放きぬ月の住居可有
 元日や掃一筆おろろ鶏の米
 麦飯の馳走子逢一筆雨古き

有隣 可貞 素羽 可貞 文好 宗賀 南柳 有隣 梅友 六川

五子一のせし嬌くくせん物堂
 雪彦の七巻子一並んで物一の鳥
 紫好煙のかくする住居可一有
 一志とまき海もぬきたるやうく
 一目ハ山子一ぬぬ々門の蝶
 床捨てハ置込ぬ夜し帰一雁
 そくくく降一みもぬ所玉虎
 貝売の灯とくもくく枇杷の毛
 仕立し一雨子ちのさる野分か
 大津給み書屋きものく光木槿
 神時る根母の色み降みくく

東李
 雪彦
 文好
 素練
 南桂
 曾梁
 文雉
 南陽
 僧貞
 以輪保
 三千雄

人よせし待て居るく組をとり
 何一処止もさくくしなみちま麻の身
 降一る雨のしり美子ちや秋の前
 人の世を啼て語るぬ虫と虫
 宵一はく日夜子あぬ秋もさし
 面もさく殊さく一秋の一おつて
 卵巨落や虫も面もさく一みして
 蓋と出ハ冬虫の虫くくく小掃か
 眼も鼻もかき生雲を州の庵
 寫通く一本ぬ一のうた燈いぬ
 今おの事一云並屋く雪尺翁

梅友
 東李
 雪彦
 二川
 宗賀
 可貞
 梅友
 東李
 渭貞
 文雉
 宗賀

夕日の袂に揺る花あや色 風也
宇と比壽も知く白く六歌仙 一喬
そよぢりーの山より妹の行末か 其記
雨雲の大ききるきる青田可南 桃里

首尾全

病後

菜の志もやーや斯くも我ハ事奉 御風
露を又ぞよおちさきの山 浪華 三津人
川長く月可育ちー魚鳴て、冬色尼
赤馬の氣ハ知るかかり、鰯君
笋々大饗會庭の一 ー 古人 月巢

涼しくと聲も打音、藍外

並の木ハ忘まぬ日みも言ー成 古人 凡仙

かまふる道り名城ぬすらん、白齋

棚神ももきぬを茶一の神ありて、杉夫

こやのゆき、江ハ燈キ、文賀

櫻町一殿の蒼々と咲志移戻、北斎

妹田堂とア子ぬるきまのひら、菜江女

古人之語

温石めさ免しもきり明石瀉 吾長
紫ろー事とさきーハ無りそ 桧松
追かけ了ゆたなくあゝぬがき 角同川 奈保里



文政二年

巳卯弘生出板

秋田本町五丁目

良榮堂以波音梓

大層

田の原の脊中か廣し夕日夜松山柳水

まじく壽し啼や心の罫処 石水

極樂へ五里もあらう々花の道 季犬

世ハ易しし櫻おちるゝ鍋の蓋 玉尊

生前の風交ハ書巻通かた

一句哉翠し人くと悼一

呼子を呼返と答もせしりり 御風

多病了志事何よりも

心みまうせぬ

死まうしハ命一の様嬉とる事一外

